

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

KIRISHIMA

霧島遺跡

県道都農綾線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

KIRISHIMA

霧島遺跡

県道都農綫線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、県道都農綾線改良工事に伴い、霧島遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

霧島遺跡は、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡として周知されておりましたが、今回の調査では旧石器時代から縄文時代にかけての遺構・遺物が検出されました。土器を持たない時代の人々の道具や、土器出現まもなくの人々の暮らしを垣間見ることができたことは、調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成9年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 藤本 健一

## 例　言

- 1　本書は、県道都農綾線道路改良事業（登り口地区）に伴い宮崎県教育委員会が行った霧島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2　発掘調査は、高鍋土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3　発掘調査は平成8年11月18日から同12月13日まで行った。
- 4　現地での実測・写真撮影は東憲章が行い、空中写真撮影は業者に委託した。
- 5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面の作成・実測・トレース・写真撮影は主として東が行い、一部を整理補助員の協力を得た。
- 6　本書で使用した位置図は国土地理院発行の1/50,000図を基に作成し、調査範囲図は高鍋土木事務所作成の1/500図を基に作成した。
- 7　土層断面図および土器の色調は「新版標準土色帖」に従った。
- 8　本書で使用した方位は位置図・調査範囲図については真北、他は全て磁北である。レベルは海拔絶対高である。
- 9　本書の執筆・編集は東が行った。
- 10　遺物は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 調査の経過	4
第2節 基本層序	4
第Ⅳ章 調査の記録	
第1節 遺構	6
第2節 遺物	
1.石器	11
2.土器	22
第Ⅴ章まとめ	23

# 挿図目次

第1図 宮崎県略図	2
第2図 遺跡位置図	3
第3図 霧島遺跡発掘調査範囲図	5
第4図 霧島遺跡土層断面図	6
第5図 集石遺構実測図	6
第6-1図 出土遺物平面・垂直分布図	7~8
第6-2図 出土遺物平面・垂直分布図	9~10
第7図 石器実測図①(細石刃・細石核・ナイフ形石器・彫器・台形石器・石錐)	12
第8図 石器実測図②(チョッパー・スクレイバー)	13
第9図 石器実測図③(スクレイバー)	14
第10図 石器実測図④(スクレイバー・使用痕剥片)	15
第11図 石器実測図⑤(石核)	17
第12図 石器実測図⑥(敲石)	18
第13図 石器実測図⑦(台石)	19
第14図 石器実測図⑧(磨石・石鍔)	20
第15図 土器実測図	21

## 表 目 次

第1表 石器計測表 .....	21
第2表 土器観察表 .....	22

## 図版目次

図版1 霧島遺跡全景 .....	25
図版2 土層断面①、土層断面②、集石造構 .....	26
図版3 遺物出土状況①、遺物出土状況②、細石核出土状況 .....	27
図版4 細石刃・細石核、ナイフ形石器・彫器、台形石器・石鏃 .....	28
図版5 チョッパー、スクレイバー①、スクレイバー② .....	29
図版6 スクレイバー③・使用痕剥片、石核、敲石 .....	30
図版7 台石、磨石、石鏃 .....	31
図版8 出上土器、爪形文、補修孔・繊維状有機質痕 .....	32

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

霧島遺跡は、縄文時代から弥生時代にかけての包蔵地として知られるいわゆる周知の遺跡であった。平成7年6月、高鍋土木事務所より県文化課に対し、遺跡内を通る県道都農綾線の改良工事について事業説明が行われ、平成7年度・8年度の2ヶ年度にわたる工事計画が示された。平成7年7月、県文化課は7年度工事予定地の確認調査を行った。搅乱等により遺物包含層の残存が希薄であったため事前の発掘調査は行わず工事時の立会を指示した。8年度工事予定地については、平成7年10月に確認調査を行った。その結果、遺物包含層の残存が確認されたため発掘調査の必要がある旨連絡した。平成8年4月、高鍋土木事務所、県文化課、宮崎県埋蔵文化財センターの三者による協議が行われ、10月以降に調査を行うこととなった。宮崎県埋蔵文化財センターでは高鍋土木事務所の依頼を受け、平成8年11月より発掘調査を開始し、同年12月に調査を終了した。

## 第2節 調査の組織

霧島遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 田原直廣

文化課長 江崎富治

埋蔵文化財係長 面高哲郎

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 藤本健一

副所長 岩永哲夫

庶務係長 三石泰博

調査第二係長 北郷泰道

調査担当 東憲章

調査協力 橋昌信（別府大学教授） 雨宮瑞生（鹿児島県考古学会員）

小野信彦（北方町教育委員会） 島岡武（川南町教育委員会）

青山尚友（宮崎県埋蔵文化財センター）

柄本久子 松浦由美（整理補助員）

高鍋土木事務所

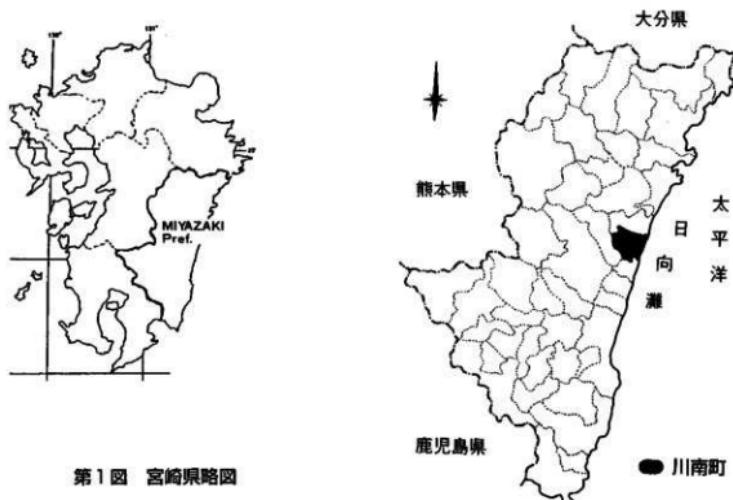
## 第II章 遺跡の位置と環境

霧島遺跡は、宮崎県児湯郡川南町大字川南字霧島に所在する。宮崎県中部に位置し日向灘に面した川南町は、上面木山(1,040m)を中心とする山地とその東麓から海岸にかけて広がる段丘面に二分され、多くの遺跡が段丘面を中心に確認されている。段丘は一連の平坦面ではなく、青鹿面、茶臼原面、国光原面、唐瀬原面、川南原面など約14の段丘面から構成される。霧島遺跡は唐瀬原面に位置し、平田川の支流で登り口集落の東部を流れる小流と西部を流れる小流が南下し合流するまでの南北約1kmの舌状台地に立地する。遺跡周辺は南向き緩斜面で、これまでに竪穴住居跡や円形周溝状遺構が発見され、多くの土器、石器類が採集されていた。

周辺の遺跡としては、藏山村(ぞうざむら)遺跡、山本遺跡、葛掛原(くづかけはる)遺跡、豊坂(とよさか)遺跡、虚空藏免(こくそうめん)遺跡など縄文-弥生の散布地が多く確認されている。旭ヶ丘(あきひがおか)遺跡や谷ノ口遺跡では旧石器時代の遺物も採集されている。霧島遺跡の南東約3kmの川南町市街地に面した後半田(うしろむた)遺跡では、旧石器時代から縄文時代まで10数面の文化層が確認され、川南町教育委員会により発掘調査されている。現在、整理作業中で未報告のため詳細は明らかではないが、西日本最古と思われる配石造構や、前期旧石器の可能性のある石器(剣片)等が出土し注目されている。川南町の南端、小丸川左岸の標高約50~60mの台地には、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基からなる国指定史跡川南古墳群が展開する。4世紀から6世紀まで継続して造営された当地域の首長層の墓域であると考えられる。

### [参考文献]

川南町教育委員会 1983 『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布報告書



第1図 宮崎県略図

第2図 運路立図 (1/50,000)



## 第III章 調査の概要

### 第1節 調査の経過

発掘調査は、県道改良事業予定地で試掘調査により遺物包含層の遺存が確認された妙章寺前の畠地部分について行った。道路拡幅分の幅2m、全長約120mという狭小な範囲での調査となった。

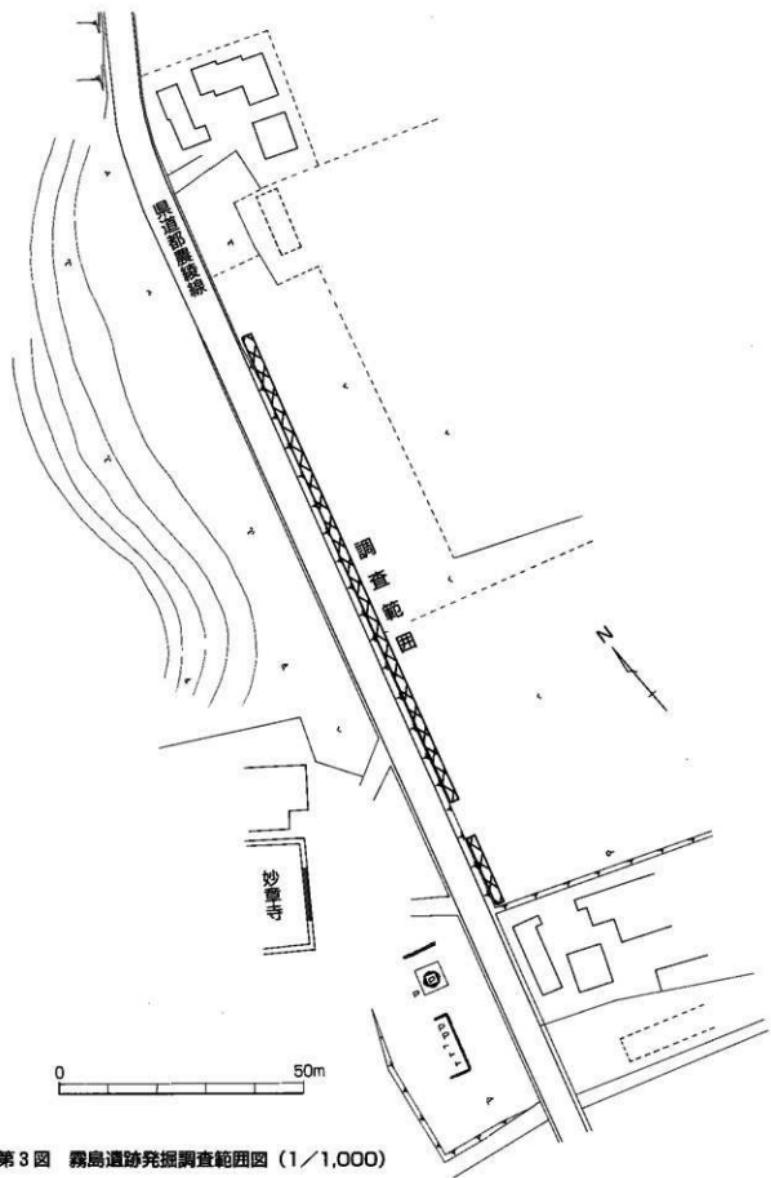
重機により表土（耕作土）の除去を行った。調査区南端では耕作土下にアカホヤ火山灰層が約20cmの厚みで残存していたが、その他の大部分ではアカホヤ火山灰層下まで耕作がおよび擾乱を受けた状態であった。調査区北端部では、旧地形の傾斜に対し平坦な畠耕作のため搅乱が著しく、耕作土除去の段階から縄文時代早期と思われる礫群が原位置を保たない状態で見られた。

作業員による掘り下げを行うと、比較的浅い位置で集石遺構1基が検出された。礫の散布状況から周辺にさらに数基の集石遺構が存在したものと考えられたが、耕作による搅乱のため原況を留めるものは見られなかった。他の遺構は検出されなかった。遺物は、無文系の土器片、石器、剝片が出土した。畦原型細石核、台形石器、スクレイバー等が土器とほぼ同レベルで出土しており注目された。掘り下げは2段階で行ったが、2度目の掘り下げでは土器は全く見られず、ナイフ形石器、石錐、細石刃、細石核、敲石、スクレイバー等が出土した。その後、始良丹沢火山灰層（AT層）下まで掘り下げ確認を行ったが、遺構、遺物は見られなかったため調査を終了した。なお、調査区横の現県道部分については、遺物包含層よりも深く路盤工（以前の県道敷設時のもの）がおよんでいたため、発掘調査は必要ないものと判断した。

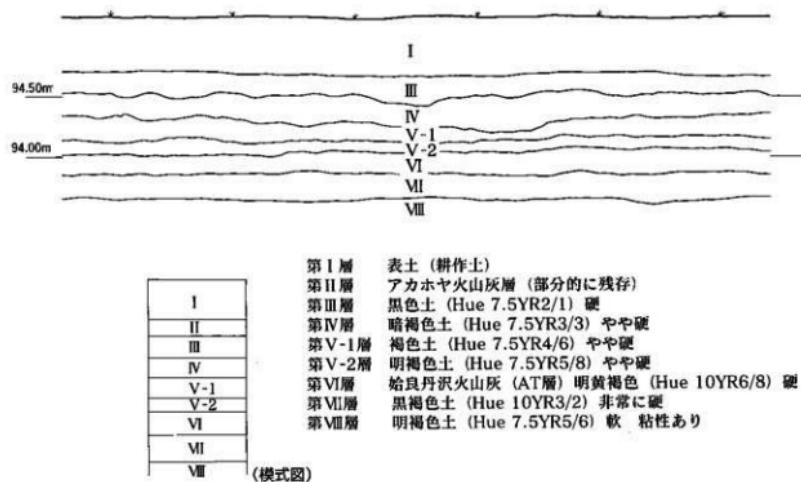
### 第2節 基本層序

霧島遺跡の基本層序を第4図に示した。表土（耕作土）は30~50cmの厚みがあり、調査区の大部分でアカホヤ火山灰層までが擾乱を受けている。調査区南端部のみアカホヤ火山灰層が約20cmの厚みで遺存していた。第III層は硬質の黒色土層で、縄文時代草創期から早期の遺物包含層となっている。第IV層は暗褐色土層で、やや硬質で若干の粘性が見られる。多くの石器、剝片が出土している。第V層は褐色土層で、粘性は低くサクサクした感触である。上部のやや硬質な部分と、下部の始良丹沢火山灰（AT層）を含みやや軟らかい部分に分層が可能である。第VI層は始良丹沢火山灰層（AT層）で、約20cmの厚みで安定した堆積を見せる。第VII層は黒褐色土層で、非常に硬質であるが拳大のブロック状に碎ける。第VIII層は明褐色土層で、軟質で粘性が高い。

遺物は、第III層・第IV層・第V-1層から出土しているが、垂直分布を見ると第III層下部～第IV層上部、第IV層下部～第V-1層上部の2つのピークが見られた。



第3図 霧島遺跡発掘調査範囲図 (1/1,000)

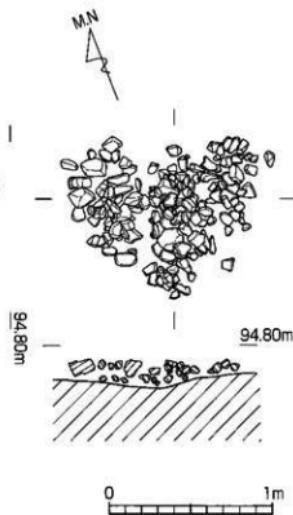


第4図 霧島遺跡土層断面図 (1/40)

## 第IV章 調査の記録

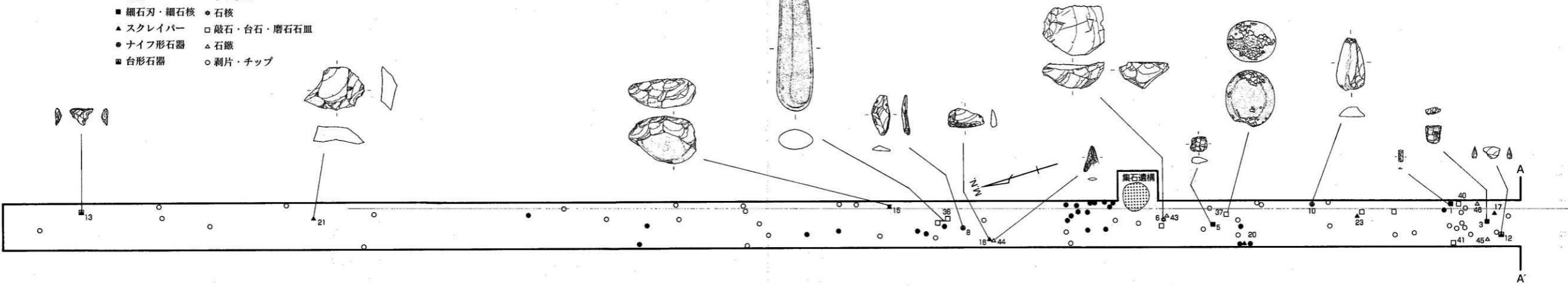
### 第1節 遺構

集石遺構1基を検出した(第5図)。検出レベルは標高94.6mであるが、上部の礫が耕作による擾乱で飛ばされていることを考慮すると、層位的には第III層上部に當まれたものと思われる。長径1.0m、短径0.9mの範囲に礫が集中しているが、北側の部分は擾乱を受けているものと思われる。礫は5~10cmの拳大のものが多く、25~30cmの人頭大のものも数個見られた。礫のはとんどが受熱で赤変し割れており、埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。礫の多くは尾鈴山系の酸性凝灰岩で、段丘構成礫として付近の露頭や河原で採集できるものである。礫は約300個程が見られ、全ての礫を除去すると若干の産みとなつたが、明確な掘り込みとは言い難く配石も見られなかった。



第5図 集石遺構実測図 (1/30)

- 土器
- 細石刃・細石核
- ▲ スクレイパー
- ナイフ形石器
- 台形石器
- チョッパー
- 石核
- 敷石・台石・磨石石皿
- △ 石鏃
- 剥片・チップ



95.00m

94.50m

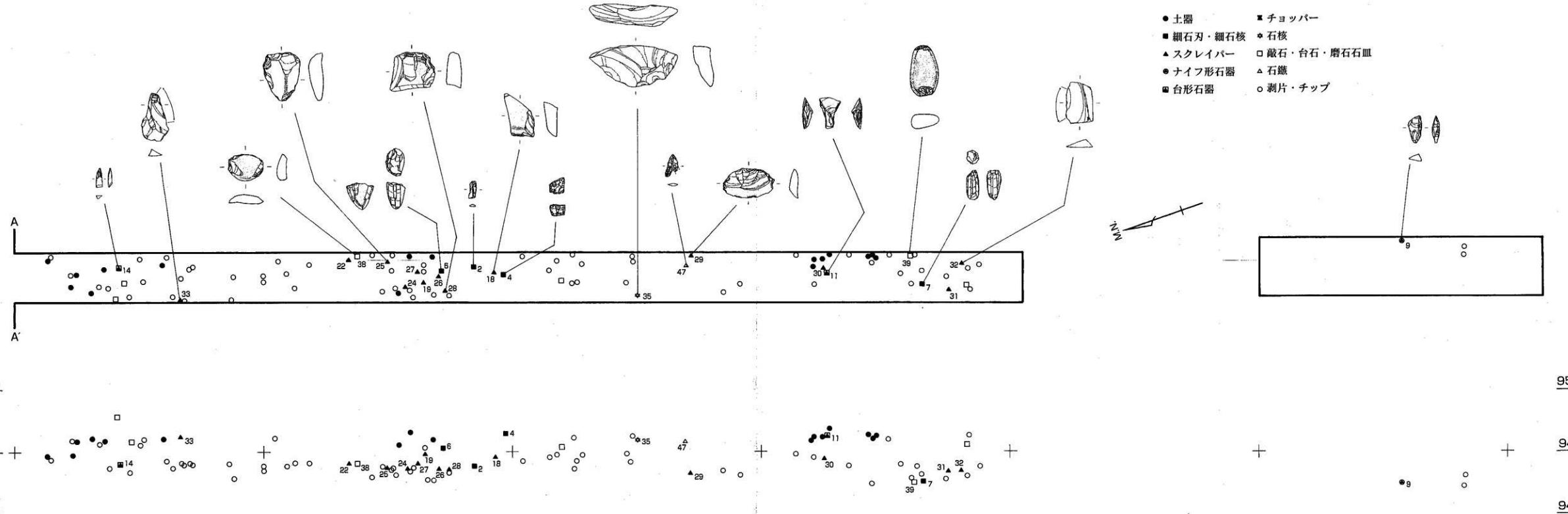
94.00m

95.00m

94.50m

94.00m

第6-1図 出土遺物平面・垂直分布図 (平面1/100、垂直1/20)



第6-2図 出土遺物平面・垂直分布図(平面1/100、垂直1/20)

## 第2節 遺物

### 1. 石器

細石刃（2点）・細石核（5点）・ナイフ形石器（2点）・彫器（1点）・台形石器（3点）・石錐（1点）・チョッパー（1点）・スクレイバー（16点）・使用痕剥片（2点）・石核（2点）・敲石（4点）・台石（2点）・磨石（1点）・石鏃（7点）が出土し、その他に剥片も多数出土している。石材としては、砂岩・シルト岩・頁岩・流紋岩・黒曜石・チャート・凝灰岩が用いられており、剥片も含めた全出土点数（240点）での各石材のパーセンテージは、チャート27.5%（66点）、頁岩20.4%（49点）、砂岩15.0%（36点）、シルト岩12.9%（31点）、黒曜石10.8%（26点）、凝灰岩7.1%（17点）、流紋岩6.3%（15点）となっている。なお、図化した各石器の石材、法量については観察表（第1表）を作成した。参照されたい。

#### ・細石刃（第7図1・2）

流紋岩製と黒曜石製のものが1点ずつ出土した。1は流紋岩製で、頭部と下端部が切断されたものと思われる。長さ1.5cm、幅0.6cmで顕著な使用痕は見られない。IV層上位に出土した。2は黒曜石製で、頭部を残している。長さ2.0cm、幅0.9cmで、表面左側縁に小剝離状の使用痕が認められる。IV層下位に出土した。

#### ・細石核（第7図3～7）

3～5は黒曜石で、野岳・休場型細石核である。一面からのみやや幅広な細石刃を剝離しており、3・4の背面は擦理面となっている。6は頁岩で、珪原型細石核である。原石の主要剝離面を打面とし、調整を施さない自然面から細石刃を剝離している。7は無斑晶流紋岩で、野岳・休場型細石核である。打面調整の後に全周囲から細石刃を剝離している。3・4・6はIII層から出土しており、レベル的には無文系の土器と共に伴っている。5はIV層、7はV-1層から出土している。

#### ・ナイフ形石器（第7図8・9）

8は流紋岩の縱長剥片を素材とし、二側辺に加工を施したものである。両側辺のプランティングは全て裏面側から施されている。先端部は欠損している。9はシルト岩の縱長剥片を素材とし、一側縁に加工を施したものである。プランティングは裏面側からのみ施され、基部には自然面を残している。8・9共にIV層上位からの出土である。

#### ・彫器（第7図10）

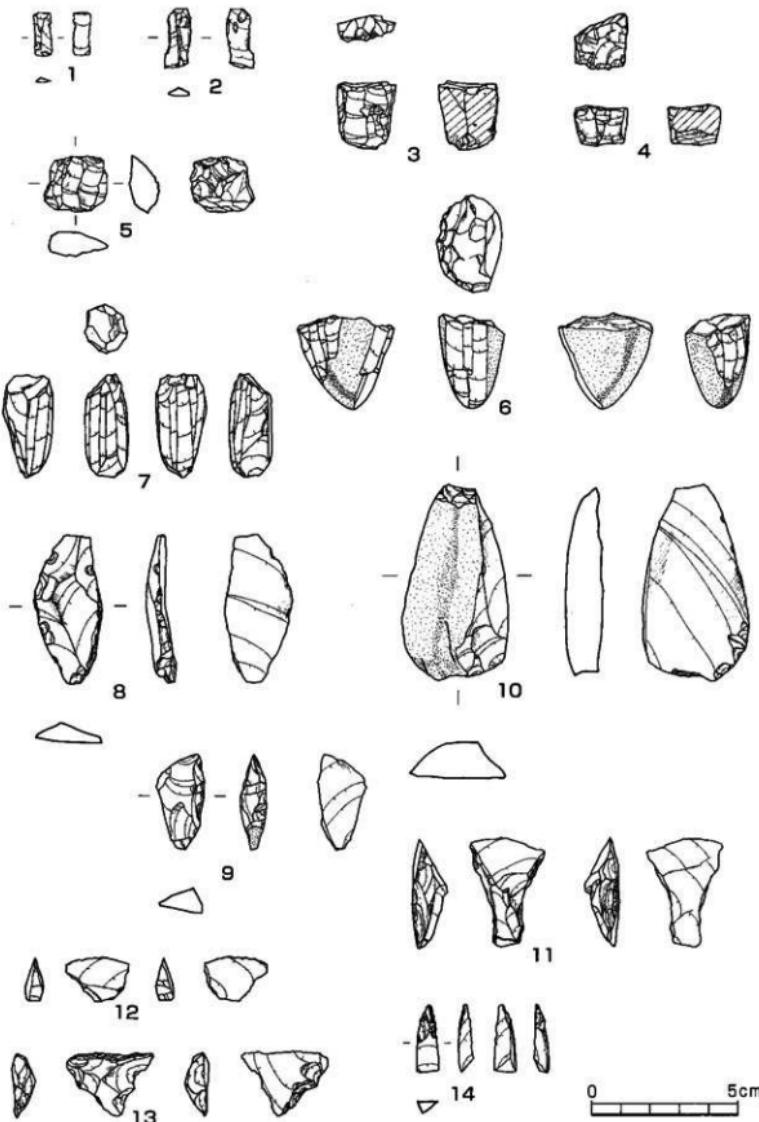
10は流紋岩製のフラットグレーパーで、自然面を有する縱長剥片を素材とする。先端部に1.2cm幅の刃部を造り出している。III層からの出土である。

#### ・台形石器（第7図11～13）

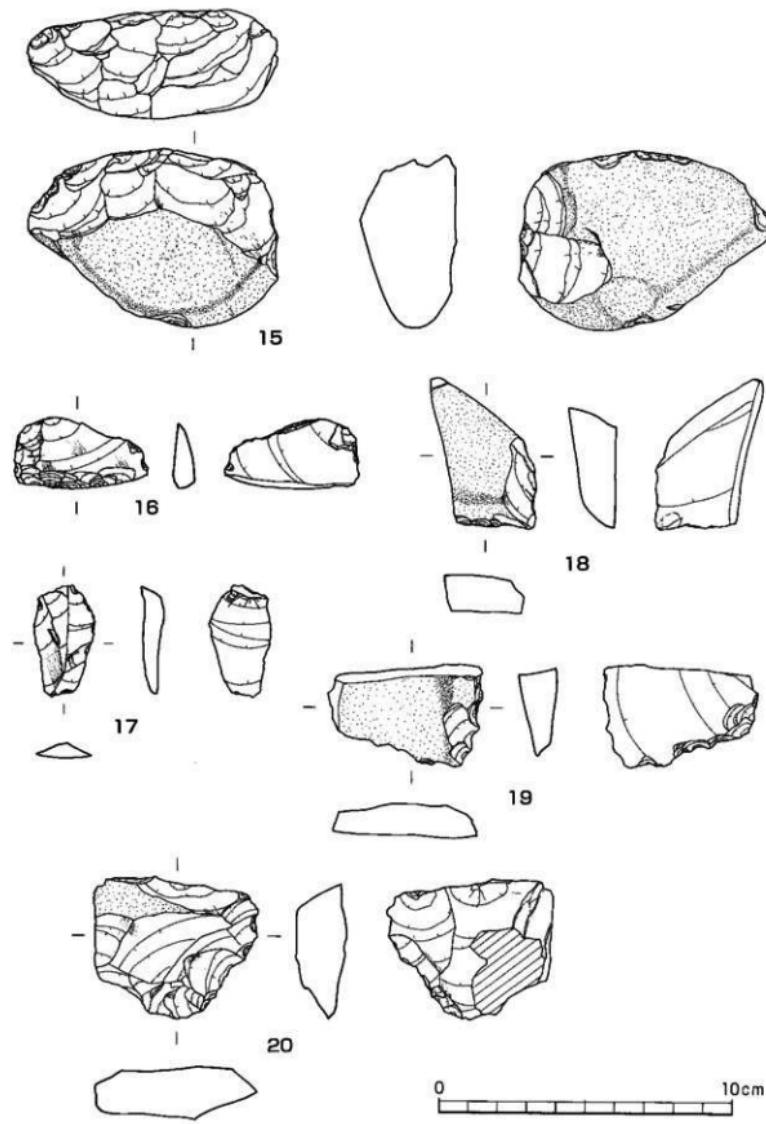
11は枝去木型の台形石器である。頁岩の横長剥片を素材とし、やや渦曲した刃部を持つ。両側縁から調整を加え基部を造り出している。調整は全て裏面側から施されている。12はシルト岩の横長剥片を素材とする。渦曲した刃部は刃こぼれ状の使用痕が認められる。欠損のため側縁の調整は不明である。13はシルト岩の不定形剥片を素材とし、両側縁に加工を加えている。直線的な刃部には小剝離状の使用痕が認められる。全てIII層からの出土である。

#### ・石錐（第7図14）

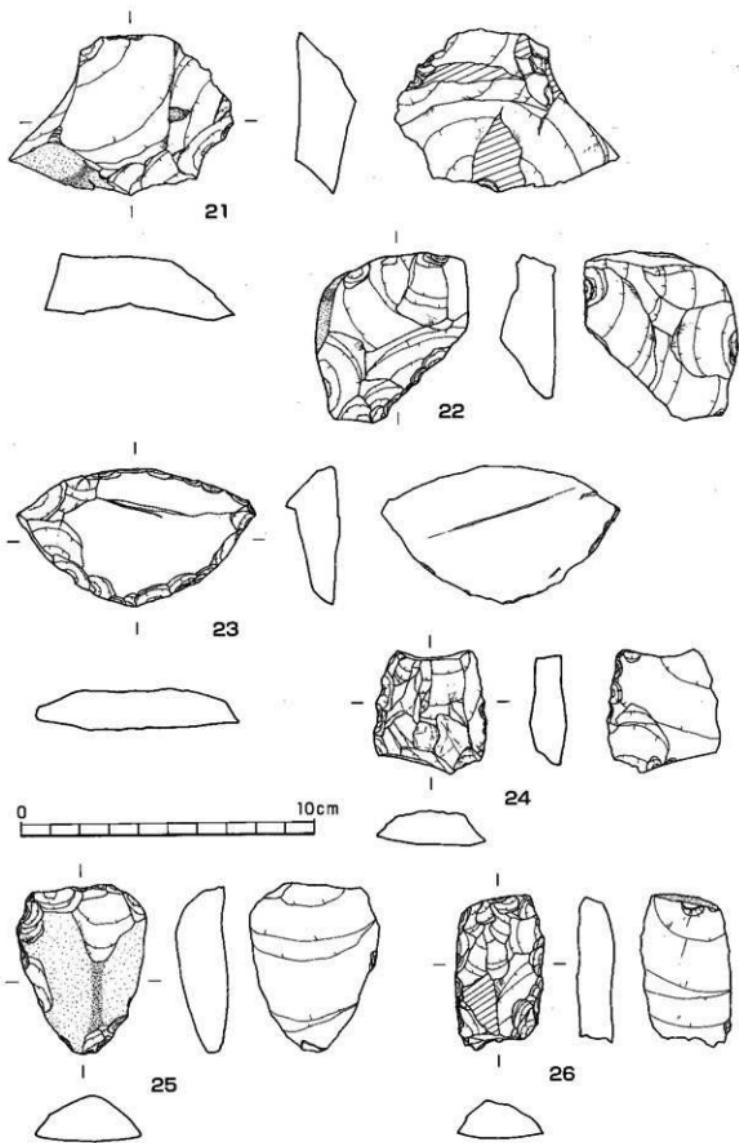
頁岩製の断面三角形の剥片を素材とし、先端部に両側縁から細かな調整を加えている。IV層中位から



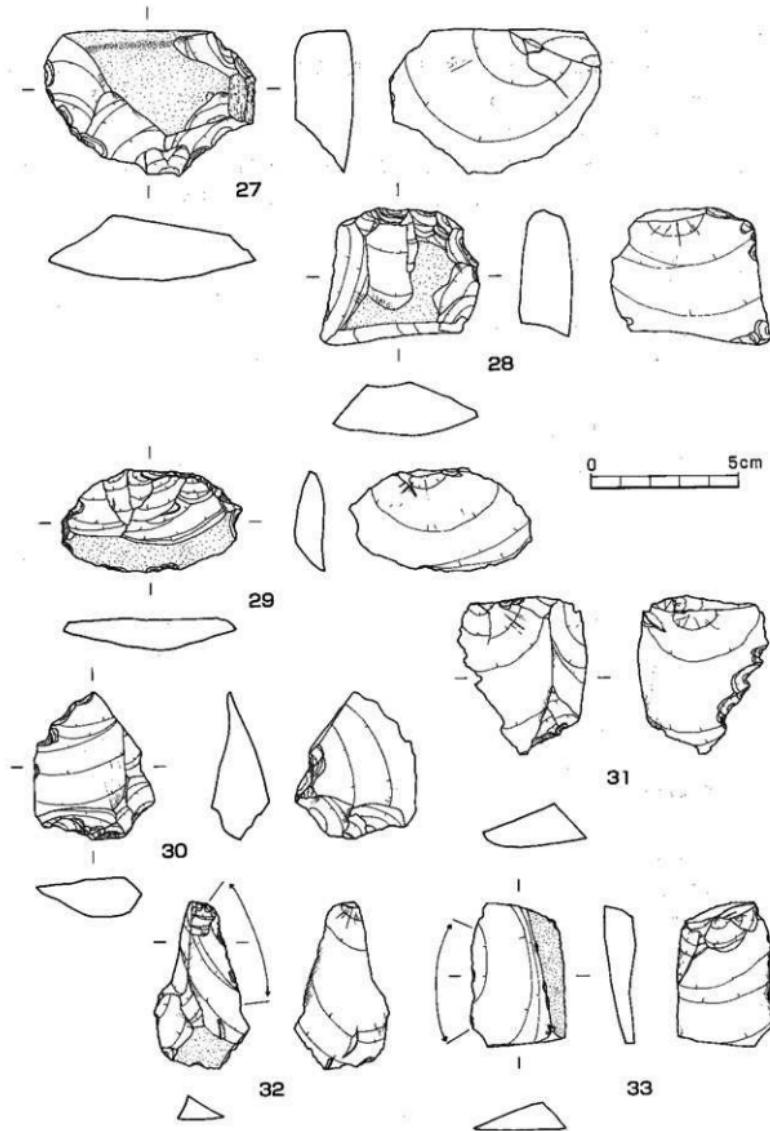
第7図 石器実測図①(細石刃・細石核・ナイフ形石器・彫器・台形石器・石錐)



第8図 石器実測図②(チョッパー・スクレイパー)



第9図 石器実測図③(スクレイバー)



第10図 石器実測図④(スクレイパー・使用痕剥片)

の出土である。

・ チョッパー (第8図15)

原石から切断された砂岩に、一次打撃と直交する裏面側からの大まかな調整を加えている。III層中位からの出土である。

・ スクレイパー (第8図16~第10図31)

16はシルト岩の不定型剝片を素材とし、平坦面を有す下側縁に細かな調整を加え刃部を形成している。17は打面を残すシルト岩の縦長剝片を素材とし、先端部と右側縁に細かな調整を持つ。16・17はIII層からの出土である。18は自然面を残す砂岩を素材とし、右側縁を大きく打ちかいた後には直交する下側縁に細かな調整を加えている。19は自然面を残す砂岩を素材とし、両側縁に加工を加えている。左側縁の剝離は裏面側から、右側縁の剝離は表面側からのみ施される。20は頁岩の不定型剝片を素材とし、全面に大まかな剝離を施したのち、右側縁に細かな加工を加えている。裏面には主要剝離面を残す。21は主要剝離面を残す頁岩剝片を素材とし、右側縁に大まかな加工を加えている。裏面には刃こぼれ状の小剝離が認められる。22はシルト岩の剝片を素材とし、大まかな剝離で成形したのち右側縁に細かな加工を加えている。23はシルト岩剝片を素材とする。表面裏面共に摺理面で剝離しており、木の葉形の全周縁に加工を施している。24は頁岩の縦長剝片を素材とし、両側縁に細かな加工を施している。上縁部は打面除去のため折り取られている。25は表面に自然面、裏面に主要剝離面を有するシルト岩剝片を素材とする。打面部に裏面側から調整を施し、下縁部に細かな加工を加えている。26は頁岩の縦長剝片を素材とし、両側縁に細かな加工を施している。裏面には主要剝離面を残す。27は表面に自然面、裏面に主要剝離面を有する砂岩の剝片を素材とする。下側からの大まかな剝離により弧状に整えた左側縁に細かな調整を加えている。28は打面を残す砂岩の剝片を素材とし、打面に裏側から細かく調整を加え刃部を作り出している。裏面には主要剝離面が残る。29は表面に自然面、裏面に主要剝離面を有するシルト岩の剝片を素材とする。打面の残る木の葉形の上縁部に、裏面側からの大まかな調整を加えたのち細かな加工を施している。V-1層からの出土である。30はシルト岩の不定型剝片を素材とし、左側縁と下縁部に調整を加えている。31は打面を残す頁岩の剝片を素材とする。左側縁に表面側からの調整が加えられる。18~28、30~31はIV層からの出土である。

・ 使用痕剝片 (第10図32・33)

32は頁岩の剝片を素材とし、表面に自然面、裏面に主要剝離面を有する。二等辺三角形状の先端部と右側縁に刃こぼれ状の使用痕が認められる。33は打面を残す頁岩の縦長剝片を素材とする。表面に自然面、裏面に主要剝離面を残し、鋭利な左側縁に刃こぼれ状の使用痕が認められる。IV層からの出土である。

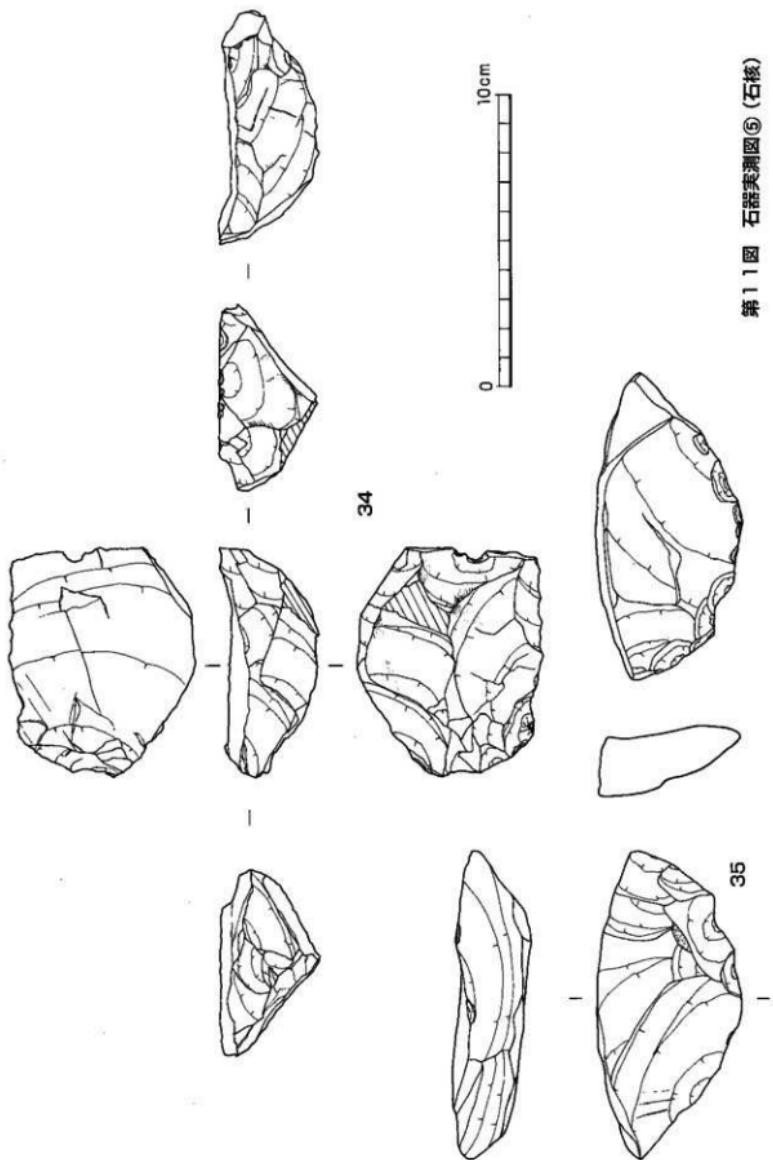
・ 石核 (第11図34・35)

34は頁岩の石核で、主要剝離面を打面とし、打点を移動させながら全周縁から剝片を剝離させている。35はシルト岩の石核で、船底状の下縁部に打点を設定している。34はIV層、35はIII層からの出土である。

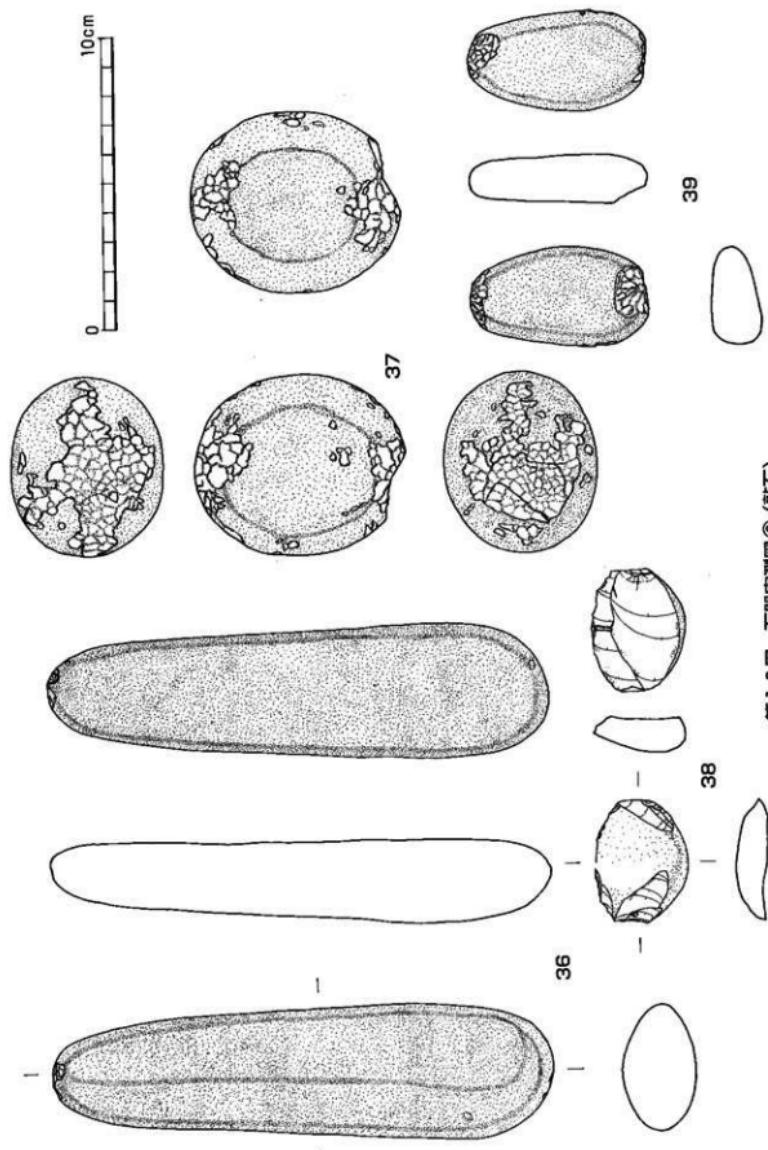
・ 敲石 (第12図36~39)

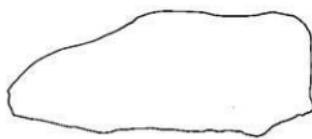
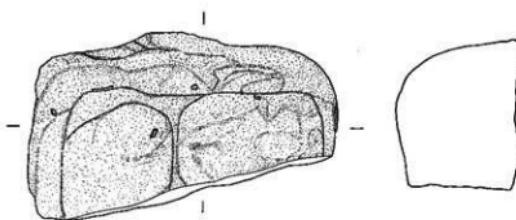
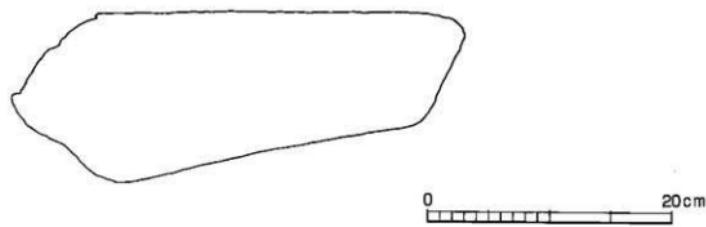
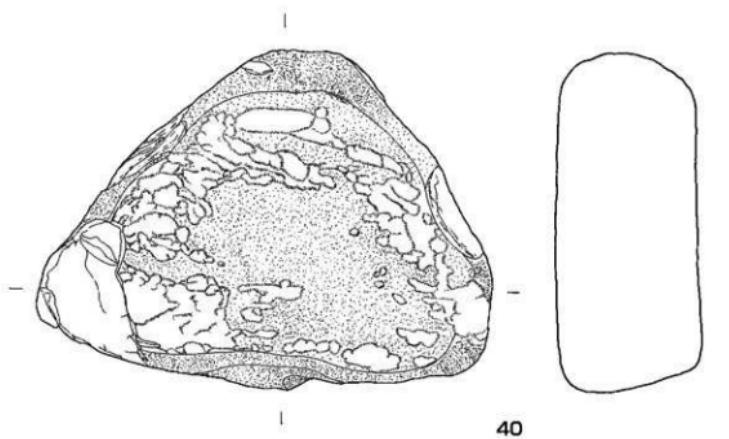
36は細長い棒状の砂岩を利用したもので、やや先細りの気味の先端部に敲打痕が見られるがさほど顕著なものではない。縦方向に二つに割れており、使用時に比較的早い段階で割れたために使用を放棄したものと思われる。37は橢円球形の砂岩を用いており、上下端部に顕著な敲打痕が認められる。38は頁

第11図 石器実測図⑤(石核)

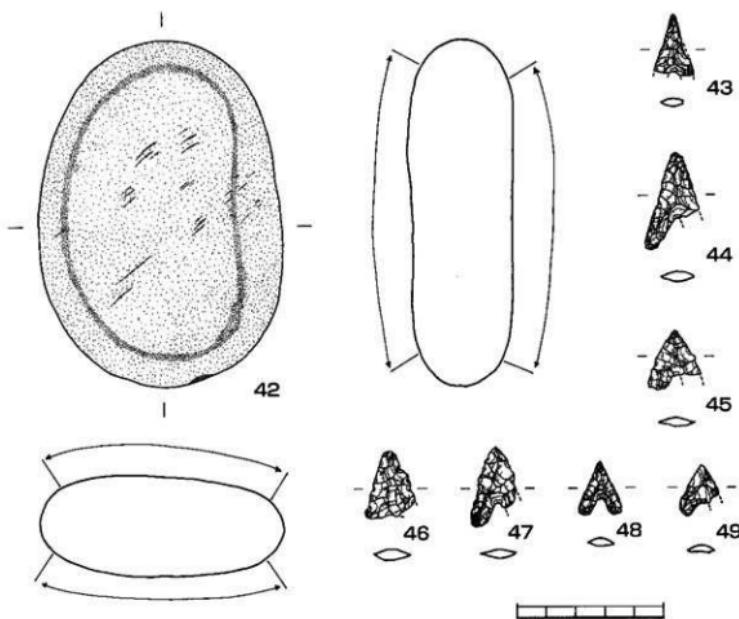


第12図 石器実測図⑥(敲石)





第13図 石器実測図⑦(台石)



第14図 石器実測図⑧(磨石・石錐)

岩の敲石片で、右側縁の剥離痕は敲打の衝撃により表皮が剥離したものと思われる。欠損後に左側縁に打面調整を加え、2次加工の剥離を施している。36~38はIV層からの出土である。39は扁平な楕円状の砂岩を用いており、上下端部に顕著な敲打痕が認められる。V-1層からの出土である。

・台石・石皿 (第13図40・41)

40・41ともに尾鈴山系酸性凝灰岩である。40は平坦面の周辺部に敲打による剥離が顕著で、中央部は磨痕が認められる。台石とともに石皿的な使用がなされたものと思われる。41は欠損しているが、上面に二つの凹面を有し、敲打による剥離痕と磨痕が認められる。石皿的な使用が想定される。図化はしていないが同様の尾鈴山系酸性凝灰岩を用いた台石(石皿)が6点出土しており、全体の出土点数は8点となる。全て人頭大かそれ以上の大型のものである。段丘礫として付近の露頭や河原で採取できるものである。全てIII層からの出土である。

・磨石 (第14図42)

42は尾鈴山系酸性凝灰岩の磨石である。扁平な円盤の両面に磨痕が認められる。耕作土中から出土しているが、本来はIII層に含まれていたものと思われる。

・石錐 (第14図43~49)

43~49は全てチャート製の石錐である。46以外は基部の抉りが深く脚部の発達した形態で、48は整美な錐形錐である。43~47はIII層、48・49は耕作土中からの出土である。

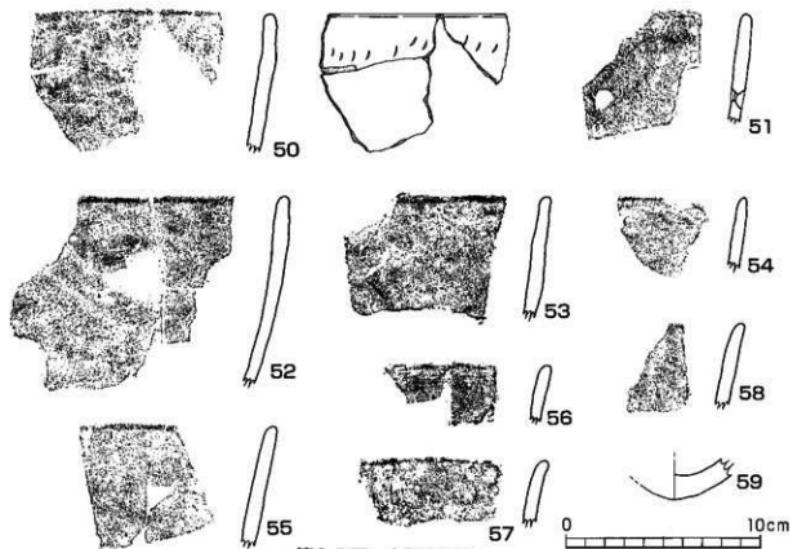
第1表 石器計測表

	器種	出土層位	石 材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	備 考
1 2	細 石 刃	IV層	流紋岩	1.5	0.6	0.15	0.1	
		IV層	黒耀石	2.0	0.9	0.3	0.7	
3 4 5 6 7	細 石 核	III層	黒耀石	2.3	2.0	0.8	4.2	野岳・休場型
		III層	黒耀石	1.4	1.8	2.0	5.0	野岳・休場型
		IV層	黒耀石	2.0	2.2	1.0	3.9	野岳・休場型
		III層	頁 岩	3.2	2.3	3.3	25.3	珪原型
		V-1層	流紋岩	3.6	1.5	1.7	10.4	野岳・休場型
		IV層	流紋岩	5.1	2.3	0.8	8.1	
		IV層	シルト岩	3.3	1.7	0.8	3.5	
8 9	ナイフ形石器	IV層	流紋岩	5.1	2.3	0.8	8.1	
10	彫 器	III層	流紋岩	6.7	3.7	1.3	35.2	
11 12 13	古 形 石 器	III層	頁 岩	3.6	2.6	1.1	7.2	枝去木型
		III層	シルト岩	2.1	1.5	6.0	1.7	
		III層	シルト岩	2.2	3.0	0.8	3.6	
14	石 錐	IV層	頁 岩	2.3	0.7	0.5	0.8	
15	チヨッパー	III層	砂 岩	6.1	8.7	3.8	211.2	
16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	スクレイバー	III層	シルト岩	2.5	4.6	0.7	9.2	
		III層	シルト岩	3.8	2.1	0.8	4.8	
		IV層	砂 岩	5.2	3.7	1.6	28.7	
		IV層	砂 岩	3.5	5.3	1.4	27.9	
		IV層	頁 岩	4.9	5.6	2.1	54.4	
		IV層	頁 岩	5.6	7.7	2.6	84.4	石核の可能性?
		IV層	シルト岩	5.8	5.3	1.9	59.1	
		IV層	シルト岩	4.2	8.2	1.8	65.5	
		IV層	頁 岩	3.9	4.3	1.3	25.6	
		IV層	シルト岩	5.8	4.5	1.7	43.9	
		IV層	頁 岩	5.3	3.1	1.3	26.3	
		IV層	砂 岩	5.0	7.3	2.2	83.9	
		IV層	砂 岩	4.7	5.4	1.8	55.4	
		V-1層	シルト岩	3.6	6.2	1.1	23.5	
		IV層	シルト岩	5.1	4.1	1.8	29.5	
		IV層	頁 岩	5.5	4.4	1.6	32.2	
32 33	使用痕剥片	III層	頁 岩	5.8	3.3	0.9	14.7	
		IV層	頁 岩	5.0	3.3	1.3	18.5	
34 35	石 核	IV層	頁 岩	3.4	7.9	6.4	147.2	
		III層	シルト岩	5.0	10.7	2.4	125.3	スクレイバーの可能性?
36 37 38 39	敲 石	IV層	砂 岩	17.1	4.6	2.8	308.4	
		IV層	砂 岩	7.2	6.2	5.2	320.0	
		IV層	頁 岩	3.2	4.3	1.2	19.5	2次加工剥片
		V-1層	砂 岩	6.1	3.5	1.8	50.3	
40 41	台 石・石皿	III層	凝灰岩	37.6	27.9	13.9	19.0kg	尾鈴山系酸性岩
		III層	凝灰岩	15.5	25.4	10.4	5.2kg	尾鈴山系酸性岩
42	磨 石	表土	凝灰岩	11.9	8.4	3.5	518.0	尾鈴山系酸性岩
43 44 45 46 47 48 49	石 鑽	III層	チャート	2.1	1.4	0.3	0.6	
		III層	チャート	3.3	1.9	0.4	1.4	
		III層	チャート	2.0	1.8	0.3	0.9	
		III層	チャート	2.2	1.7	0.4	1.5	
		III層	チャート	2.8	1.6	0.3	1.1	
		表上	チャート	1.9	1.5	0.4	0.5	
		表土	チャート	1.8	1.4	0.3	0.4	

(欠損品の法量については現存値)

## 2. 土器（第15図）

土器は総数で103点（破片）の出土があり、部位ごとの内訳は口縁部14点、胴部88点、底部1点である。全体に胎土は精良で比較的薄手の作りである。焼成も良好で硬質である。器面調整は内外面ともにナデである。胎土には有機質（繊維状）が混入された痕跡が認められる。50は口縁部下約2cmに爪押圧が見られるが、1cm前後の間隔で散漫な施文状況である。また、52と同一固体の可能性が高く、そうであるならば爪形文は一周していないことになる。他の破片は全て無文であるが、51には口縁部下4.5cmの位置に径1cmの円形の補修孔が見られる。口縁部は肥厚や屈曲の見られない素口縁で、やや内湾気味のもの（50～52）、直行するもの（53～55）、やや外反気味のもの（56～58）の3タイプに分けられる。底部は尖底気味の丸底である（59）。全てIII層からの出土であるが、その多くはIII層上位である。



第15図 土器実測図

第2表 土器観察表

器種	部位	文様および調整		色調		胎土の特徴
		外面	内面	外面	内面	
1 深鉢	口縁部	爪形文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・石英・有機質混
2 深鉢	口縁部	補修孔	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・石英・小礫・有機質混
3 深鉢	口縁部	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・石英・有機質混
4 深鉢	口縁部	ナデ	煤付着	ナデ	にぶい橙	角閃石・石英・小礫・有機質混
5 深鉢	口縁部	ナデ		ナデ	にぶい橙	角閃石・石英・小礫・白色砂粒
6 深鉢	口縁部	ナデ		灰黄褐	灰黄褐	角閃石・石英・有機質混
7 深鉢	口縁部	ナデ	煤付着	褐灰	灰黄褐	角閃石・石英・小礫・白色砂粒
8 深鉢	口縁部	ナデ		にぶい橙	にぶい黄橙	角閃石・石英・有機質混
9 深鉢	口縁部	ナデ		にぶい橙	灰褐	角閃石・石英・有機質混
10 深鉢	底部	ナデ		にぶい赤褐	橙	角閃石・石英・小礫・白色砂粒

## 第V章 まとめ

霧島遺跡は、台地上平坦面から南向きの緩斜面にかけて立地する。以前の分布調査や確認調査では円形周溝状造構や打製石器が確認され、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡として認識されていた。今回の発掘調査では、アカホヤ火山灰層より上位での造構・遺物の検出は見られず、縄文時代早期以前の調査が中心となった。県道改良事業に伴い、道路拡幅部分のみの限られた面積の調査であったが、出土した造構・遺物は重要な情報を内包した貴重な資料である。特に、旧石器時代から縄文時代への移行期にあたると思われる土器・石器群の出土は、資料の少ない該期の研究にとって大いに寄与するものとなる。以下、霧島遺跡の調査で得られた成果について簡略ではあるがまとめを述べる。

### ・造構について

造構は集石造構1基が検出された。III層上位に営まれたものと推定される。耕作により搅乱を受けていたものの周辺に焼磧が散布していたことや、調査面積の狭さを考慮すればさらに数基の集石造構が分布していたものと思われる。造構に明確に伴う土器の出土は見られなかったものの、縄文時代早期の所産と考えられる。出土した遺物の中で第図に示した磨石や石器が早期に属するものと思われる。出土した石器は、基部の抉りが深く脚部の発達した形態で剝離調整も細かい。宮崎・鹿児島両県で出土している縄文草創期に属する石器を見ると、基部が平らかやや凹む形態で、主要剝離面を残すなど剝離調整がやや大まかな印象を受けるものが多い。これらに対して霧島遺跡出土の石器には、表土中からの出土ではあるものの完成された歛形器も含まれ、早期中葉以降の所産と考えられる。

### ・出土土器の位置づけ

土器は、103点出土した。1点のみ爪形文を持つ口縁部片が含まれるが、他は無文である。胎土に細い繊維状の痕跡が見られ、何らかの有機物が混入されたものと思われる。これらの土器は、出土レベル的には細石刃・細石核・台形石器・スクレイバー等の石器と伴っていたが、その解釈には注意をする。

九州では、隆起線文土器や爪形文土器などに代表される最古の土器群と細石刃・細石核が共伴することが知られている。南九州においては鹿児島県内で横井竹ノ山遺跡・塚ノ越遺跡・加治屋園遺跡・上場遺跡などで細石刃・細石核と土器が共伴している。これらのことから縄文草創期のある時期まで細石器の使用が行われたと考えられる。この時期の土器は、厚手で焼成が甘く軟質な仕上がりのものである。これに対して霧島遺跡出土の土器は、焼成が良好で硬質な仕上がりとなっており、時期的に下るものと考えられる。宮崎県内出土の草創期土器の中で焼成が良好で硬質なものとしては、宮崎市堂地西遺跡や宮崎市椎屋形第1遺跡出土の爪形文土器がある。これらは、隆唇が消失し口縁部に爪形文が施される段階の土器としてとらえられ、比較的新しい段階にあるものと考えられる。そして両遺跡ともに細石器は消失し作っていない。霧島遺跡出土の土器は、爪形文の施文状態や焼成などから堂地西遺跡・椎屋形第1遺跡に後出するものと考えられる。霧島遺跡出土の爪形文に類似するものは、貝殻文円筒形土器最古段階の岩本タイプの中に見いだすことができる。また、底部が尖底気味の丸底であることは、早期の押型土器に共伴する無文土器により近いものとも考えられる。霧島遺跡出土の土器の位置づけは類例の増加を持って慎重に行う必要があろうが、現時点では草創期末から早期初頭の中でとらえておきたい。

### ・出土石器について

霧島遺跡出土の細石核は5点であり、石材的には黒曜石3・頁岩1・流紋岩1である。頁岩を用いた

6は珪原型細石核で、南九州の一部に局地的に分布するものである。細石器文化の中で比較的新しい時期に位置づけられる。他の4点は野岳・休場型細石核である。黒曜石を用いた3点は、やや幅広な細石刃を剥離しており比較的古い段階のものと考えられる。7は無斑晶流紋岩を用いている。東九州に分布の中心を持つ船野型細石核に優勢な石材であるが、剥離技法としては両側面からも細石刃を取っており野岳技法と判断される。石材については地域色の反映であろうか。

台形石器は3点が出土した。11は枝去木型である。台形石器の使用形態については、細石刃のような組み合わせ使用と単体使用の両者が考えられるが、枝去木型のものは単体使用が想定されている。

18の砂岩製のスクレイパーは、表面に自然面、裏面に主要剥離面を残している。細かな加工を加えた刃部とほぼ直交する剥離が見られ、やや鈍い角（ほぼ直角）を作り出されている。川南町内で類似した石器が出土している。それらの石器は、砂岩製で表面に自然面、裏面に主要剥離面を残し、ほぼ直角の角を作り出されている。角の両側の剥離に差が見られず、スクレイパーとしての用途の他に石錐的な用途が想定されるものが含まれる。霧島遺跡出土のものは、角の両側の剥離に明確な差が認められスクレイパーと判断されたが、周辺地域に特徴的な石器である可能性も否定できず注意を要する。

#### ・遺物の出土状況について

前述した土器と石器類との関係は、出土レベル的には共伴しているかのように思われたが、現時点での土器の位置づけが草創期末から早期初頭と考えられることから、出土した細石刃・細石核・台形石器と土器の共伴については否定されよう。石器についても、形態的特徴から早期中葉以降と考えられるところから、細石器や土器との共伴関係は想定し難い。調査時の土層断面の観察では、第III層は安定した土層の堆積に思われたが、出土した遺物の状況を見ると時期差を含む遺物が同レベルから出土しており、後世の搅乱は受けていないものの、土層堆積時あるいはそれから間もない時期の二次的な移動が想定されよう。

#### 〔参考文献〕

- 雨宮瑞生 1994 「南九州縄文時代草創期土器編年」—太めの隆帯文土器群から貝殻文円筒形土器への変遷』『南九州縄文通信』No.8
- 鹿児島市教育委員会 1990 『横井竹ノ山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 鹿児島市教育委員会 1992 『掃除山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 鹿児島県教育委員会 1981 『加治屋園遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 菅付和樹 1993 「椎屋形第1遺跡(A地区)」『南九州における縄文時代草創期の諸問題』宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会
- 高橋信武 1990 「南の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』No.324
- 吹上町教育委員会 1990 『塚ノ越遺跡』吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 宮崎県教育委員会 1985 『堂地西遺跡』『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第2集
- 宮田栄二 1995 「移行期における石器群の変遷」『旧石器から縄文へ』  
鹿児島県考古学会・宮崎考古学会・合同研究大会



霧島遺跡全景



土層断面①



土層断面②



集石遺構



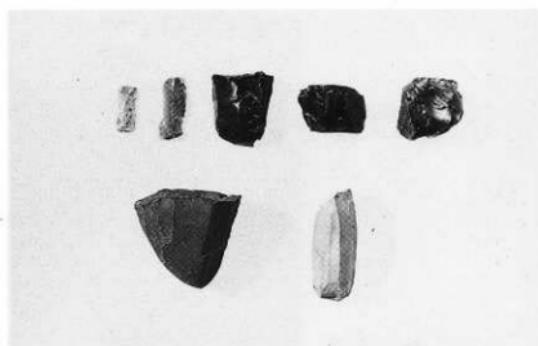
遺物出土状況①



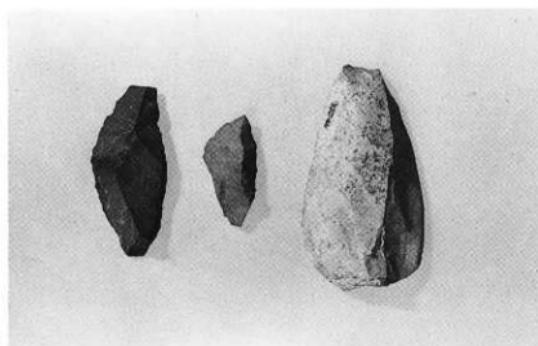
遺物出土状況②



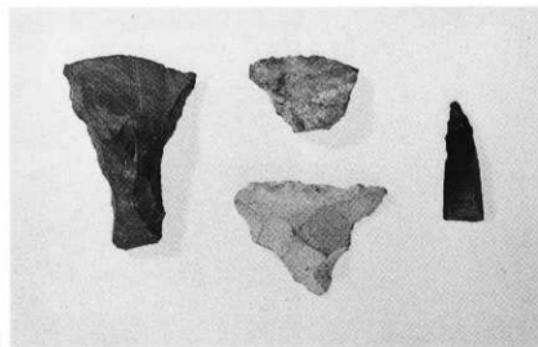
細石核出土状況



細石刃・細石核



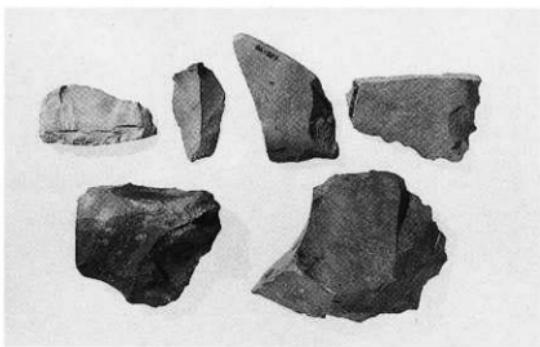
ナイフ形石器・形器



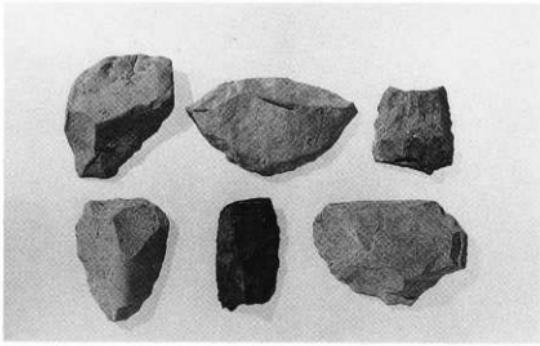
台形石器・石錐



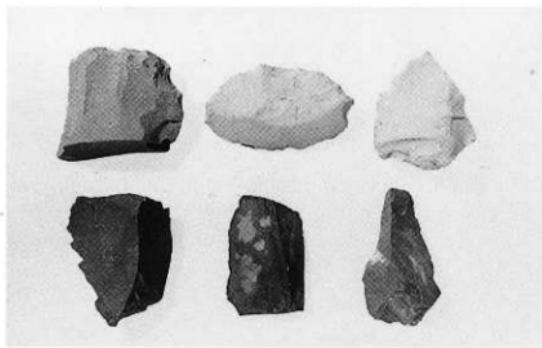
チッパー



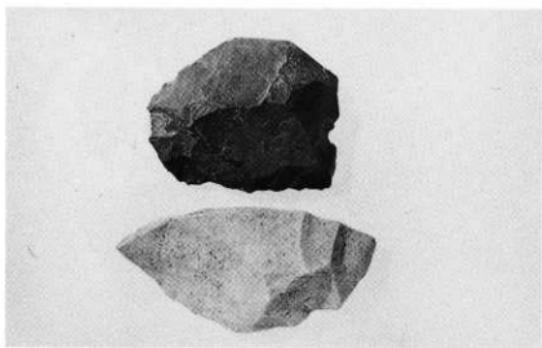
スクレイパー①



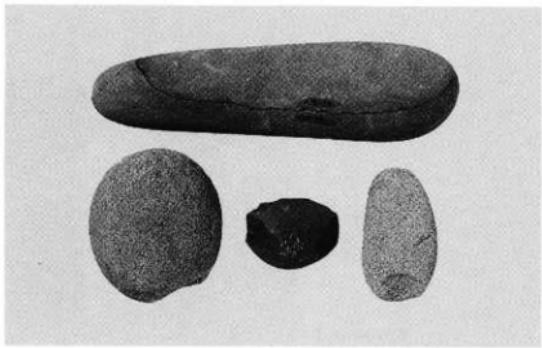
スクレイパー②



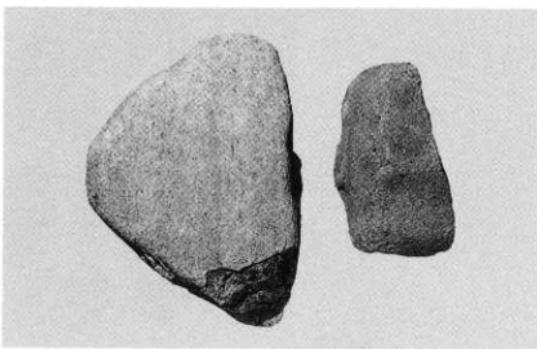
スクリイバー③・使用痕剥片



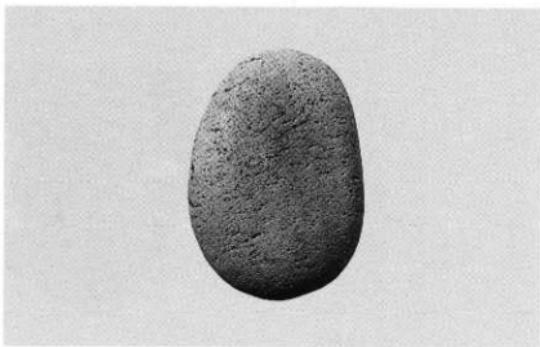
石核



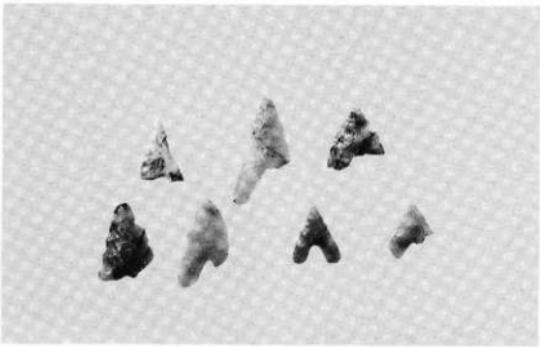
敲石



台石



磨石



石鏃



出土土器



爪形文



捕修孔・織維状有機質痕

報告書抄録

フリガナ	キリシマイセキ					
書名	霧島遺跡					
副書名	県道都農綾線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第4集					
編集者名	東 恵章					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880 宮崎市神宮2丁目4番4号					
発行年月日	1997年3月31日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
キリシマイセキ 霧島遺跡	コヌ グンカワミナミキョウ 児湯郡川南町 オオアザカワミナミアザカリキツ 大字川南字霧島	32°13'08" 付近	131°30'21" 付近	1996.11.18 1996.12.13	250m <sup>2</sup>	道路改良
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
散布地	縄文時代 (早期・草創期) 旧石器時代	集石遺構 1	縄文土器 石器 旧石器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

## 霧島遺跡

県道都農綾線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880 宮崎県宮崎市神宮2丁目4-4  
電話 0985(21)1600

印刷 有限会社富士写真印刷  
〒880-02 宮崎県佐土原町  
電話 0985(74)2179